

# ジャパンマイコンカーラリー 2009

「ロボマガ」記者・城井田 勝仁

## 競技内容

ジャパンマイコンカーラリーは、いわゆるライントレースロボットによる競技だ。実行委員会の支給するマイコンボードを搭載した、幅30cm×高さ15cmに収まる大きさの自走ロボットが、一筆書きの周回コースを疾走して、そのタイムを競う。

コースは幅30cm×高さ3cmの黒色のパーツを組み合わせて作られ、トレース用のラインは幅2cmの白色で描かれる。その両脇には幅1cmの灰色ラインも描かれ、アナログセンサーによる詳細なトレースも可能となっている。

コースの難易度はきわめて高く、クランク(直角カーブ)やS字カーブ(最小内径450mm)、立体交差(傾斜角度10度以内)などが含まれる。2007年(2006年度)大会からはレーンチェンジコースも導入され、さらに難易度が増した。

決勝トーナメントでは、予選で用いられたコースレイアウトに手が増えられる。さらに進行方向が逆となることから、予選とは大きく異なる攻略法が求められる。



今回の全国大会で用いられた決勝トーナメントのコース。全長63.92mの難コースだ。

## 「黒子に徹する」ルネサス

大会名に記されていないことから、広く知られてはいないが、ジャパンマイコンカーラリーは第1回大会から株式会社ルネサスグループの支援を受けて運営されている。ロボット制御用マイコンとしてH8が使われているのはそのためだ。

そのルネサスからは、毎年欠かさず数人の役員が全国大会の観戦に訪れる。今大会では、北野哲郎氏(写真左)と赤尾泰氏(写真右)が、全国大会の熱気を体験した。

特に「今年からマイコンを担当するということで」と初めて観戦に訪れた赤尾氏は、「聞くと見るとではずいぶん違う」と、その印象を語った。「まず(参加者の)真剣さを感じました」と話し、「選手だけではなく、支えている人の思いのようなものを肌で感じました」と続ける。

北野氏は、4年連続での観戦となることから、「マシンを見ていますと、いろいろな部品がステップアップしてるんですよ」と、マイコンカーの変遷を営業マンらしい観点から分析する。そして、ジャパンマイコンカーラリーを「冬の甲子園」と称し、「(これから)あまり前へ出ないで、黒子に徹しながら、教育参画していきたい」と話す。

赤尾氏にいたっては、「(我々が)表に出る必要がない」と

まで言い切る。「(企業名の)冠を付けたものと発想が違う」と、ジャパンマイコンカーラリーを高く評価する。

二人とも、「(ジャパンマイコンカーラリーは)どんどん自己増殖しながら広がっている」と感じており、「(これまで通り)黒子が一番いい」との認識をさらに深めたようだ。



左が、4年連続で観戦している北野哲郎氏(株式会社ルネサステクノロジ取締役 営業本部 本部長、株式会社ルネサス販売 代表取締役 取締役社長)。右が、初観戦となる赤尾泰氏(株式会社ルネサステクノロジ取締役 マイコン統括本部 本部長 武蔵事業所長)。